

M. J. Edwards,  
*Origen against Plato*,  
Ashgate Studies in Philosophy and  
Theology in Late Antiquity, 2002, pp. 191

出 村 み や 子

著者のマーク・ジュリアン・エドワーズはオックスフォードのクライスト・チャーチで教父学を担当しており、これまでもオリゲネスに関する研究 (*JEH*1993, *SP*1993, *JTS*1995, *TS*1998) を中心に、グノーシス主義 (*JTS*1989, *SP*2001), ヌーメニオスとペレギュデス (*CQ*1990), ポリュフィリオス (*JHS*1990, *Hermes*1996), プロティノスとプロクロス (2000), ユスティノスのロゴス論 (*JEC*1995), アレクサンドリアのクレメンス (*VigChr*2000) など多くの論文を学会誌に発表している碩学である。彼はこれらの個別研究の蓄積を通じて、本書においても古代キリスト教を取り巻く周辺世界の状況を視野に入れながら、オリゲネスの神学思想を多角的視点から解明する試みを行っている。本書の構成は四章からなり、序論に続いて第一章でオリゲネスを取り巻くアレクサンドリアの思想状況 (ユダヤ教, キリスト教, アレクサンドリアのキリスト教異端思想の諸層) が概観され、次に第二章以下でオリゲネスとプラトン主義思想の相違が明らかにされている (まず第二章では神観念について、続いて第三章では魂の問題が、最後に第四章で聖書解釈の問題が論じられている)。

本書に付された *Origen against Plato* は、本書の冒頭で著者自身も述べているようにいささか読者の意表をつく表題であり、初期キリスト教において数多く生み出された「論駁書」の文学類型を想起する方もおられるだろう (オリゲネスのプラトン論駁?)。しかし本書を読み進めればこの表題の意図するところは、エドワーズがそれまでに発表した個別研究の蓄積を踏まえ、教父学の分野に定着していたオリゲネスとプラトン主義思想との関係の再検討を試みていることがわかる。本書の中で全般的に考察の対象となっているのは、オリゲネスとプラトン自身の思想との関係というよりも、オリゲネス当時にアレクサンドリアで流布していたプラトン主義の思想の系譜とオリゲネスとの関係であり、同時にオリゲネス神学の成立をプラトン主義の文脈において解釈しようとしてきた従来の研究者の解釈姿勢に対しても検討が加えられている

のである。C. H. Bigg, *The Christian Platonists of Alexandria*, London, 1886 を嚆矢として、H. Koch, *Pronoia und Paideusis: Studien über Origenes und sein Verhältnis zum Platonismus*, Berlin, 1932, や C. Andresen, *Logos und Nomos. Die Polemik des Kelsos wider das Christentum*, Berlin, 1955 など、これまでのオリゲネス研究にはオリゲネスとプラトン主義思想との関係を機軸としたものが多かったのは事実であり、本書はオリゲネス自身のテキストと当時の様々な哲学・神学テキストを比較検討することによって、オリゲネス神学の成立をプラトン主義の文脈に限定して解明しようとする従来の解釈の問題点を指摘している。

オリゲネスをプラトン主義者とみなす見方が教会史において今日に至るまで継続してきた原因として、エドワーズは次の三つの要因を指摘する。第一にオリゲネスの生誕の地アレクサンドリアが、当時哲学都市として名声を博していたこと、第二に、オリゲネスより半世紀ほど後に生まれた新プラトン主義者ポリュフィリオスの証言の影響があること。これについてエウセビオスによれば、ポリュフィリオスはオリゲネスが哲学者アンモニオスの聴講生であり、ギリシア人のように思考し、ギリシア人の思考をキリスト教に導入し、著名なプラトン主義者やピュタゴラス主義者の書物に通じていたと述べたと証言している（『教会史』第六巻 19）。第三にオリゲネスの現存する文書には、聖書的と言うよりは、当時の哲学者たちの用語法に従った記述が見られるのではないかという指摘である（本書序論）。

以上のような視点を意識しつつ、エドワーズは本書においてその反論を試みている。第一の点に関して彼は、アレクサンドリアの文化的状況を哲学の視点のみならず、ユダヤ・キリスト教の文献学的伝統においても考察する必要があることを指摘しており、特にオリゲネスにおけるこの地の聖書解釈の伝統の影響に留意すべきこと、特にユダヤ教知恵文学の影響の重要性を指摘している。そしてオリゲネスの叙述には、哲学的な探求方法というよりも、「一つの啓示テキストを別のテキストから注解するという方法」が常套的手段として見られることを指摘している（本書 58 頁）。このことを第二章の神認識の問題について見れば、エドワーズはプラトン主義者アルキノオスのような哲学的探求による神認識の方法がオリゲネスの時代に流布していたことを指摘する。しかしオリゲネスはこのような神認識の方法を採用せず、『ケルスス駁論』第七巻 42 と 45 において、類推、抽象、総合の三つの方法によって神認識を可能にしようとするプラトン主義の論敵ケルススの同様の主張を引き合いに出して批判している。

このことはオリゲネスが、この時代のプラトン主義の哲学的神理解の方法とは異なり、神理解のためには神による啓示の助けが必要であると確信していたことを示すという。

第二点は、本書の記述の主要部分をなすもので、オリゲネスの具体的な記述に当たりながらこのような評価が誤りであることを示している。その一例としてエドワーズが挙げる『諸原理について』第二巻三章六は、オリゲネスによるプラトン主義の告白としてしばしば誤解されてきたテキストであり、ここで彼はヨハネ福音書 17:14, 16 の「私はこの世からの者ではない」という救い主の言葉について論じている。オリゲネスは、ヨハネ福音書において救い主が別の世からの者であるように述べられたことについて、「この別の世について説明するのはわれわれには困難であると先に述べたのは、ギリシア人がアイデアと名づけている表象の存在をわれわれも主張しているとの観念を抱く機会を誰かに与えないためであった。精神の空想や気まぐれな考えのうちにはしか存在しない、非物体的世界について語ることは、われわれの意図とは無縁である」と述べている。このテキストは、従来オリゲネスにおけるプラトン主義的影響を示す事例とみなされてきたものであるが、むしろここに彼がプラトン主義のアイデアに関する思弁をキリスト教が受け入れないことを示そうとする意図を読みとる必要があることを指摘している。同様の指摘が、オリゲネスと魂の先在論や、魂の輪廻の思想との関係についても指摘されている。実際本書では繰り返し、オリゲネスの著作にプラトン主義的表現が認められることと、オリゲネスがそれらの思想を受容していることとは別であって、むしろ論駁的意図のもとに引用されていることに注意が促されている。

さらにエドワーズは、オリゲネスがプラトン主義哲学の信奉者であるとの誤解のもとになった前述のポリュフィリオスの言葉について興味深い提言を行っている（本書 53 頁以下）。ポリュフィリオスの理解によれば、最初の新プラトン主義者プロティノスの教師であったアンモニオスが、オリゲネスの師でもあったとされ、戦後のオリゲネス研究に決定的な役割を演じたクルゼルとノートンもこれを受けて、若い頃にこのアンモニオスの下で学んだオリゲネスをプラトン主義者とみなしてきたという。しかしエドワーズはアンモニオスの名のもとに新プラトン主義者とペリパトス派の二人の哲学者がほぼ同時代に存在したこと、またオリゲネスの名のもとにキリスト教徒とプラトン主義者の二人が存在したために、それらが混同されてキリスト教徒のオリゲネスをプラトン主義者とみなす見解が流布するようになったと推定し、これらの人名を

区別すべきことを主張している。

第三の点についてエドワーズは、オリゲネスの記述が従来プラトン主義思想の文脈において解釈されてきた原因として、オリゲネスが当時の哲学的諸思想に知悉し、当時の思想的課題と正面から取り組み、時にそれらの思想に含まれる誤りを指摘するなど自律的哲学を展開していたためであると主張する。この主張は、オリゲネス解釈には当時の思想的背景の多角的検討が不可欠であることを示すと共に、言葉や表現のレベルでの類似性に惑わされてオリゲネスの主張を誤解し、ある特定の学派に区分することで満足していた従来の研究姿勢を批判するものであり、こうした批判が本書では何度も繰り返されている。そしてこれまでの研究者が想定してきたようにプラトン主義が当時のアレクサンドリアにおいてある種の疫病であったとしても、その最も確実なワクチンは実際にプラトンを読むことであることをオリゲネスは知っていたのであり、オリゲネスの著作にはそれに感染した兆候どころか、むしろプラトニズムに対する抗体を含むのだと結論付けている（本書 161 頁）。ここには、ちょうど薬のイメージを想起させる表題が付与されたエピファニオスの反異端論駁書『薬箱（パナリオン）』や、アウグスティヌスのマニ教論駁を考察する際にも必要なことであるが、当時のキリスト教と競合関係にあった諸思想との弁証法的関係において教父の思想を理解する必要性が指摘されており、古代キリスト教文書の理解のためには、当時の複雑な思想状況に踏み込んで、個々の資料を丁寧に読み解いてゆく必要があることが示唆されている。

最近のオリゲネス研究を見る限り、こうした指摘はいろいろな形で出されており、特にオリゲネスに対する後世の異端宣告の問題の再検討や、聖書解釈の伝統に定位してオリゲネスを論じる研究が増えている。筆者もオリゲネスの復活論についての検討を試みた際に個々のテキストの具体的検討から、やはりエドワーズと同様の結論に達した経緯がある。しかしオリゲネスの神学体系の中心主題である神理解、人間ないし魂理解、そして聖書解釈の全般にわたり、オリゲネスとプラトン主義思想の系譜との関係を包括的に問うた研究は未だ提示されていないように思われる。その意味で初期キリスト教神学思想の成立とプラトン主義諸思想との関係を根本的に問い直そうとする本書の基本姿勢は特筆すべきであり、とりわけプラトン主義思想との対決がオリゲネスの神学にとって無視できない問題であったことが明らかになるのである。

---